

# 軽 蔑

## ——常不輕菩薩によせて——

### 原 実

法華経の「常不輕菩薩」は自らは教示もせず、讀誦もせず「不專讀誦經典」(*noddeṣaṃ karoti na svādhyāyaṃ karoti*) のまま、「凡有所見」の四衆に「我深敬汝等。不敢輕慢」(*nāham āyusmato yuṣmākaṃ paribhavāmi/aparibhūtā yūyam*) とのみ言っていたから彼等の不興を買い (*krudhyanti*)、土塊や棒を投げつけられた (*loṣṭaṃ vā daṇḍaṃ vā kṣipanti* 「杖木瓦石。而打擲之」) が、それでも自らは怒らず、軽蔑を受けるのみであったが故にその名 (*sadā-paribhūta*) を得たと言われる<sup>(1)</sup>。その先駆が佛弟子の一人 Pūrṇa (Pali Puṇṇa)<sup>(2)</sup>に見出されるとは丹治昭義氏の指摘したところであるが<sup>(3)</sup>、一般に古代インドに在って他人を軽蔑する事、又軽蔑される事がどの様に考えられていたか、又更に軽蔑された者はそれにどの様に対処すべきかを考察する事も「常不輕菩薩」の背景を知る上に一助となる様に思われる。又中世インドには敢えて自ら軽蔑を求めて「言辱打辱」に耐え、その「忍辱」に己が積善の道を見出していた出家遊行者が存在していた事も知られている。

今回法華経文化研究所より誘いを受けたので、以下にこれまで折に触れて言及した<sup>(4)</sup>ところに、古代インドの箴言集 (Subhāṣita, Indische Sprüche) と遊行 (*saṃnyāsa*) 関係論書の中から関連章句を加えて、「軽蔑」の諸側面を明らかにしたいと考える。

#### (1) 「言辱」

誹謗は他人を傷つけるが、それは急所 (*marman*) を衝くこと、武器以上で致命傷となる。

*na tathā tapyate viddhaḥ pumān bāṇaiḥ sumarma-gaiḥ  
yathā tudanti marma-sthā hy asatāṃ puruṣeṣavaḥ (IS.3256)*

人は急所必中の矢によって射られても、急所に刺さったまま (*marma-stha*) (抜けない) 悪人達の (悪口の) 矢が撃つ程には苦しめない<sup>(5)</sup>。

*saṃrohāti śarair viddhaṃ vanaṃ paraśunā hatam  
vācā duruktaṃ bibhatsaṃ na saṃrohāti vāk-kṣatam*

(*MBh.5.34.75=/13.107.58=IS.5806*)

矢によって射られ、斧によって打たれても、森は再生する。

しかし、言葉によって罵倒されるは恐ろしく、言葉による傷は再び癒える事がない<sup>(6)</sup>。

斯くて言辱は茨、矢、槍、劍等の武器、毒蛇、毒に譬えられる。

「茨」 *vāk-kaṅṭhaka*

*aruṃtudaṃ paraṣaṃ rūkṣa-vācaṃ vāk-kaṅṭhakair vitudantaṃ manuṣyān  
vidyād alakṣmika-tamaṃ janānāṃ mukhe nibaddhāṃ nirṛtiṃ vahantaṃ  
(MBh.1.82.9=5.36.8)*

急所を衝く粗暴な言葉の茨で、口汚く人を刺す者を、その口中に死を含む、人中最も不吉な輩と知れ。

「矢」 *vāk-sāyaka, -salya*

*vāk-sāyakā vadanān niṣpatanti yair āhataḥ śocati rātry-ahani  
parasya vā marmasu te patanti tān paṇḍito nāvasrjet pareṣu (MBh.1.82.11)*

口より落下した言葉の矢によって撃たれば、人は日夜悩み悲しむ。

それは他人の急所に落ちれば、賢者はそれを他人に放ってはならない<sup>(7)</sup>。

「猛毒」 *halāhala, kālakūṭa, viṣa。*

*nanv āsraya-sthitir iyaṃ tatra kālakūṭa*

*kenottarottara-viśiṣṭa-padopadiṣṭā*

*prāg arṇavasya hṛdaye vṛṣa-lakṣmaṇo 'tha*

*kaṅṭhe 'dhunā vasasi vāci puṇaḥ khalānām (IS.3329)*

猛毒 Kālakūṭa よ、誰が汝に、次第に高きに昇る住居移転を教えしか？

最初は海中奥深く、次いでシヴァの喉もとに、そして今や意地悪き人の口(舌)の上に住すれば<sup>(8)</sup>。

「言辱」による致命傷、不治の病は人を「死」に導く。

*marmāṅy asthīni hṛdayaṃ tathāsūn ghorā vāco nirdahantīha puṃsām*

*tasmād vācaṃ ruṣatiṃ rūkṣa-rūpāṃ dharmārāmo nityaśo varjayīta*

*(MBh.5.36.7=IS.4732)*

この世に悪口雑言は人の急所を、骨を、心臓を、将又息(の根)を焼き尽す。

されば人倫の道を楽しむ者は、常に悪口雑言を避くべし<sup>(9)</sup>。

言辱による深手は、身内、特に長上が目下の者に罵られる場合就中顕著で、蔑視(*avamāna*)は殺害(*vadha*)に等しく<sup>(10)</sup>、軽蔑されたままに生き長らえる者は「生ける屍」(*jīvan mṛta*)<sup>(11)</sup>とさえ言われた。

(2) 「誹謗」

(2-1) 人情

併しながら兎角人は他人の噂を好む。それは又「称讃」か「非難」の何れかに傾くが、多くの場合人は自分の非に気付かなくとも、他人の非には敏感である。

*sahajāndhā-dṛśaḥ svadurnaye paraḥsekṣaṇa-divyacakṣuṣaḥ*  
*svaḡuṇocagiro muni-vratāḥ para-varṇa-grahaṇeṣu asādhavaḥ*  
 (IS.6967=Śisupālavadha 16.29)

自分の失敗には生まれつきの盲 (*andha*)、他人の失敗には天眼 (*divya-cakṣus*)、自分の成功には雄弁、他人の成功には沈黙の誓を守る、こは善からぬ輩共。

*khalah sarśapa-mātrāṇi para-chidrāṇi paśyati*  
*ātmano bilva-mātrāṇi paśyann api na paśyati* (IS.2045)

悪人は他人の欠点だと芥子粒程のものでも観るが、自分のものはビルバの実程のもでも観つつも尚、観ようとし<sup>(12)</sup>ない。

*na tathā vaktum icchanti kalyāṇān puruṣe ḡuṇān*  
*yathaiṣāṃ vaktum icchanti nairḡuṇyam anuyuñjakāḥ* (MBh.12.288.23=IS.3259)

誹謗者 (*anuyuñjaka*) が不徳を言いたがる程には、人々は (他) 人の善徳を口にしたがらない<sup>(13)</sup>。

(2-2) 嫉妬

人情の自然として他人の噂をすると、兎角そこに「羨望、嫉妬」が介入する。中でも高位にある者は兎角「嫉妬」の対象となりやすい。

*nocchritam saḡate kaścit prakriyā vaira-kārikā*  
*sucer api hi yuktaṣya doṣa eva nipātyate* (MBh.12.112.57-8=IS.3829)

なんびとも高位の人に耐え難し、優位は敵意を産む。清廉潔癖なりとも非難を免れず<sup>(14)</sup>。

*nāḡuṇi ḡuṇinaṃ veti ḡuṇi ḡuṇiṣu matsari*  
*ḡuṇi ca ḡuṇa-rāḡi ca viralaḥ saralo janaḥ* (IS.3544)

徳なき者は徳ある者を知らず、徳ある者も徳ある (他) 者に嫉妬す。

徳ある者にして (他人の) 徳を喜ぶ正直者は稀なり。

悪人 (*durjana*) の口にかかれば、長所も欠点となるから (Nitiśataka 43=IS.2375)、万人を満足さす事は所詮不可能である (IS.6922)<sup>(15)</sup>。

## (2-3) 「誹謗=己を卑しめる」

併しながら他人を誹謗する事は自分を卑しめる所以となる。

*parivādaṃ bruvāṇo hi durātmā vai mahā-jane*

▶▶ *prakāśayati doṣāṅ svān sarpaḥ phaṇam ivocchritam (MBh.12.115.14=IS.3966)*

人前で口汚く罵る輩は、己が欠点を証すのみ、蛇が鎌首を擡げるに似て。

*vidhvasta-para-guṇānāṃ bhavati khalānām ativa malinatvam*

*antarita-śaṣi-rucām api salila-mucām malinimābhyadhikāḥ (IS.6126)*

他人の徳を汚す悪人共、彼等の穢れは更に大となる、

黒（雨）雲にして月（の輝き）を蔽えば、そは（自らの）暗さ（=穢れ）いや増すのみ。

*durjano dūṣayaty eva satām guṇa-gaṇaṃ kṣaṇāt*

*malinī-kurute dhūmaḥ sarvathā vimalāmbaram (IS.2862)*

悪人は忽ちにして善人の徳を汚す。とかく煙は穢れなき大空を汚せば<sup>(16)</sup>。

この様な人品卑しき者は、蠅を初めとして卑しき動物に譬えられる。

*atiramaṇīye kāvyē 'pi piśuno dūṣaṇam anveṣayati*

*atiramaṇīye vaṇuṣi vraṇam iva makṣikā-nikaraḥ (IS.148)*

いと麗しき詩作にも悪人は粗搜しなす。いと麗しき体にも蠅の群が傷口を求める如く

に<sup>(17)</sup>。

彼等は更に駱駝（IS.1548）、帝釈鷲（IS.1712）、鴉（IS.3424）、犬（MBh.12.115.11=/=IS.4237）、猪（IS.2127）に喩えられるのみならず、動物よりも更に劣るとも言われる<sup>(18)</sup>。

## (2-4) 「誹謗と称讃」

併し兎角人は己を基準として他を量るから<sup>(19)</sup>、同じ事でも或る人は善意に取り、又或る人は悪意に取る。斯くて「善意」と「悪意」は善人と悪人を区別する所以となり、ここに両者を分ける徴標が存在する。

▶▶ *makṣikā vraṇam icchanti puṣpam icchanti śaṭpadāḥ*

*sajjanā guṇam icchanti doṣam icchanti pāmarāḥ (IS.4652)*

蠅は傷口を求め、蜂は花を求む。善人は長所を求め、愚人は短所を求む。

*guṇāyante doṣāḥ sujana-vadane durjana-mukhe*

*guṇā doṣāyante kim iti jagatām vismaya-padam*

*yathā jīmūto 'yaṃ lavaṇa-jaladher vāri madhuraṃ*

▶▶ *phaṇi pūtvā kṣīraṃ vamati garalaṃ duḥsahataram (IS.2138)*

善き人（*sujana*）の口に昇れば短所も長所となり、悪しき人（*durjana*）の口に昇れば長所も短所となる。ここに如何なる不思議かある。

雲は海水を飲むも降らすは甘露の水、毒蛇は乳を飲むも吐くはいと耐え難き毒。

*brūte 'nyasyāsato 'py āryo guṇān doṣāṃs tu durjanaḥ*

*tulye 'py asatyē kiṃ tv eko gacchaty ūrdhvam adho 'paraḥ (IS.4514)*

貴き人 (ārya) は在らざるも他人の徳を口にす、悪き人は在らざるも過失を口にす。

何れも真実には非ざれど、一は上 (天国) に、他は下 (地獄) に赴く<sup>(20)</sup>。

### (3) 善人

「誹謗」にして己を卑しめる所以とあれば、賢者 (paṇḍita) は他を罵倒しない。

*para-paraivādaḥ pariṣadi na kathaṃ cit paṇḍitena vaktavyaḥ*

*satyam api tan na vācyaṃ yad uktam asukhāvahaṃ bhavati (IS.3931)*

賢者は、如何なる場合でも、他人の悪口を人前で言うべきでない。

真実であっても、口にすれば不快を催す言葉を口にすべきでない。

「他人非難」は「自己礼賛」と共に賢者 (dhira) の慎むところである。

*satyaṃ mṛdu priyaṃ vākyaṃ dhīro hita-karaṃ vadet*

*ātmotkarṣaṃ tathā nindāṃ pareṣāṃ parivarjayet (IS.6736)*

賢者 (dhira) は真実にして柔和、優しくて為になる事を語り、

自己礼賛 (ātmotkarṣa)<sup>(21)</sup>と他人中傷を避くべし<sup>(22)</sup>。

されば賢者は、悪口雑言を潔しとせず、寧ろ死を選ぶ。

*varam maunaṃ kāryaṃ na ca vacanam uktam yad anṛtam*

*varam klaivyaṃ puṃsāṃ na ca para-kalatrābhigamanam*

*varam prāṇa-tyāgo na ca piṣuna-vākyeṣv abhirucir*

*varam bhikṣāśīvaṃ na ca para-dhanāsvādana-sukham (IS.5981)*

虚言を吐くより沈黙守れ、男たる者他人の妻<sup>(23)</sup>に近づくより性的不能者たるべし。悪

口雑言を好むより命捨てるが勝る、他人の財を享受するより乞食が勝る<sup>(24)</sup>。

### (4) 毀誉褒貶の超越

#### (4-1) 「善人の本質不変」

兎角「悪口」は人情の致す所、善人と雖も所詮「非難」を免れないとあれば、人はそれを気にする事はない。

*yadi kāko gajendrasya viṣṭhāṃ kurvīta mūrdhani*

*sa svabhāvo hi nicānāṃ yo gajo gaja eva saḥ (IS.5204)*

仮令鴉が巨象の頭上に糞を垂れるも、それは賤しき者の本性にて、象は象たるに変わりなし<sup>(25)</sup>。

性悪しき輩がその長所を隠そうと努めても、善人の徳は自然に顕れる。

*trṇair ivāgniḥ sutarāṃ vivṛddhim āchādyamāno 'pi guṇo 'bhyupaiti*  
*sa kevalaṃ durjana-bhāvam eti hantuṃ guṇān vāñchati yaḥ parasya*  
 (Bṛhatsaṃhitā74.10=IS.2592)

草に覆われていても、火が（却って）燃え盛る様に、美德は隠されていても（自然に）顕れる。

他人の美德を損なわんとする者は、ただただ独り自ら悪しき輩となるのみ。

（4-2）「毀誉褒貶の超越」

されば Bhagavad-gītā には、賢者須く毀誉褒貶の彼岸に身を置くべしと説かれる。

*tulya-nindā-stutir maunī saṃtuṣṭo yena kena cit*  
*aniketāḥ sthira-matir bhaktimān me priyo naraḥ* (Bhagavad-gītā12.19)

誹謗と称讃とを同一視し、寡黙にして何ものにも満足し、住家なく（雲水の生活）堅固心あり、誠信に満てる人はわが愛するところなり。（辻直四郎訳）<sup>(26)</sup>

*yad yad brūyād alpā-matis tat tad asya sahet sadā*  
*prākṛto hi praśaṃsan vā nindan vā kiṃ kariṣyati*  
*vane kāka ivābuddhir vāsamāno nirarthakam* (MBh.12.115.7)

小人が何を言わんと、彼は常に耐えるべし。凡人が讃えんと、罵らんと、何をかなさん。森に鴉が囀る如く、愚人は無意味な事を喚くのみ<sup>(27)</sup>。

*sūktiṃ karṇa-sudhāṃ vyanaktu sujanas tasmin na modāmahe*  
*brūtāṃ vācam asūyako viṣa-mucaṃ tasmin na khidyāmahe*  
*yo yasya prakṛtiḥ sa tāṃ vitanutāṃ kiṃ nas tayā cintayā*  
*kurmas tat khalu karma janma-nigāḍa-cchedāya yaj jāyate* (IS.7154)

善き人が耳に甘露な名言なすとも我等喜ばず、悪しき人が毒ある言なすも悩まず。

人々各自、己が本性明かすべし、我等いかで思い煩わん。生（死輪廻）の枷を断つ業なすのみ。

## (5) 「軽蔑の探求」

(5-1) 毀誉褒貶を超越した者は進んで軽蔑を探求し、軽蔑に耐える「忍辱」に積善の道を見出した。

*saṃmānād brāhmaṇo nityam udvijeta viśād iva  
amṛtasyeva cākaṅkṣed avamānasya sarvadā (162)  
sukhaṃ hy avamataḥ śete sukhaṃ pratibudhyate  
sukhaṃ carati loke 'sminn avamantā vinaśyati (Manu-smṛti 2.163)*

バラモンは常に尊敬を毒の如く恐るべし。そして常に軽蔑を甘露の如く望むべし。蓋し人は蔑まれて安らかに眠り、安らかに目覚め、安らかにこの世を渡る。蔑む者は滅す<sup>(28)</sup>。

*ativādāṃs titikṣeta nāvamanyeta kaṃ cana  
na cemaṃ deham āśritya vairam kurvita kena cit (47)  
krudhyantaṃ na pratikrudhyed ākruṣṭaḥ kuśalaṃ vadet  
sapta-dvārāvākīrṇāṃ ca na vācam anṛtāṃ vadet (Manu-smṛti 6.48)*

非難に耐え、なんびとをも蔑すむべからず。この身体によりてなんびとも敵対するなかれ。

怒れる者に対しても怒るべからず、罵られれば祝言なせ。七門に拡がる嘘言なすべからず<sup>(29)</sup>。

*ākruśyamāno nākrośen manyur eva titikṣataḥ  
ākroṣṭhāraṃ nirdahati sukṛtaṃ cāsya vindati (IS.856=MBh.1.82.7, 5.36.5, 12.288.16)*

(他人に)罵られても(他人を)罵るべからず、忍辱する者の憤懣(*manyu*)<sup>(30)</sup>は非難する人を焼き、彼よりその善業を得る。

*ākrośa-parivādābhyo vihiṃsanty abudhā budhān  
vaktā pāpam upādatte kṣamamāṇo vimucyate (IS.857=MBh.5.34.71)*

愚者は非難軽蔑により賢者を傷つける、非難者は罪を得、忍耐者はそれより解放される<sup>(31)</sup>。

(5-2) 「その方法」(*jaḍavad, bālavat, unmattavad*)

軽蔑された者が、軽蔑する者の功德を己に呼寄せるのであれば、彼は寧ろ進んで軽蔑される事を求めるが、それには特別な方法が存在した。それは故意に痴人(*jaḍavat*)、狂人(*unmattavat*)<sup>(32)</sup>、幼童愚人(*bālavat*)を装って世人の軽蔑を喚起するに在る<sup>(33)</sup>。以下にMBh.14巻に語られるバラモン Saṃvarta の物語、Viṣṇu Purāṇa 2-13その他に語られる有名

な Bharata 物語、更に後世の遊行者の生活規定を盛る Nārada-parivrājaka-Upaniṣad<sup>(34)</sup> の関連部分を訳出する。

(5-2-1) Saṃvarta

司祭者を探し求めていた Marutta 王に、Nārada 仙は言う。

*rājann aṅgirasah putrah saṃvarto nāma dhārmikah  
caṅkramīti diśah sarvā dig-vāsā mohayan prajāḥ* (MBh.14.6.18)

王よ、Aṅgiras の子で徳勝れた Saṃvarta と名付ける行者は、裸のまま (*dig-vāsas*) 世人を欺きつつ諸方を遊行している。

*unmatta-veṣaṃ vibhrat sa caṅkramīti yathā-sukham  
vārāṇasīm tu nagarīm abhikṣṇam upasevate* (MBh.14.6.22)

彼は狂人 (*unmatta*) の装いをして気ままに遍歴しているが、時折 Benares の街にやって来る。

Marutta 王は Nārada 仙に如何にして彼を識別し得るか、彼の特徴を問うと仙は答えて言う。「彼に死体を見たらすぐに踵を返して引き帰すから、その後について行けばよい」。仙にかく言われて王は街の入口に死体を置いておくと、果して Saṃvarta が現われた。王がどこまでもついて来るのを見て Saṃvarta は彼を威嚇し、街外れ迄来た時彼は王に痰、唾を浴びせ (*śleṣmaṇā cāpi rājānaṃ ṣṭhivanaiś ca samākirat*: MBh.14.6.31) 拳句の果てに王の依頼を断った。ここに有徳 (*dhārmika*) のバラモン行者 Saṃvarta は狂人 (*unmatta*) を装い、裸体 (*dig-vāsas*) のまま、人々を欺きつつ (*mohayan prajāḥ*) 諸国を遍歴していたと言われる<sup>(35)</sup>。

(5-2-2) Viṣṇu-purāṇa 2.13は最高の真理を悟った Bharata の物語を載せている。彼は神々と一切生類と同一視して、師家に入門してもヴェーダも唱えず、梵語を隠し、世間を超越していた<sup>(36)</sup>。以下、原文が長文に亘るので、それを便宜上注記に記する。

色々話し掛けられても痴人 (*jaḍa*) の如く、梵語を語らず、俗語で答えた。(40)

このバラモンは汚い恰好をし、弊衣を纏い、唾を垂らし、全ての街の人から軽蔑 (*paribhūta*) されていた。(41)

尊敬 (*saṃmānanā*) を Yoga 増進の最大の障りとなす故に、

Yoga を行ずる彼は世人に軽蔑されて (*avamata*) Yoga の成就を見出す。(42)

Yogin は善人の法を汚す事なく、世人の蔑む (*avaman-*) に任せ、彼等と交ってはならない。(43)

大慧の彼は金胎神の言葉を心して、人前では痴人 (*jaḍa*)、狂人 (*unmatta*) の態をなしていた<sup>(37)</sup>。(44)



この Bharata 物語 (*jaḍa-bharata-carita*) は初期 Vedānta 学派の書の中に言及されている。

*tasmād evaṃ vīditvānam advaita yojayet smṛtim*

*advaitam samanuprāpya jaḍaval lokam ācaret (Māṇḍūkya Kārikā 2.36)*

それ故にこの（現象の融消を）かくの如しと知って、不二（の境地）に憶念を結びつけよ。不二に達して、あたかも（感覚の鈍き）愚者の如くに世間に行ずべし。（中村元訳）<sup>(38)</sup>

（5-2-3）後世の Vedānta 派の Nārada-parivrājaka Upaniṣad は先ず盲、聾、啞等の身体障害者を遊行無資格者として排除した後、遊行者の生活を規定するが、先ずその第三章から関係部分を訳出する<sup>(39)</sup>。

*pūjito vanditāś caiva suprasanno yathā bhavet*

*tathā cet tādṛyamānas tu tadā bhavati bhaikṣa-bhuk (3.18, p.139 10-11)*

供養敬礼されて心歓喜する様に、打擲されてもその様にする者、彼ば（真の）乞食者なり。

Yati は一切を捨て「身を棄して」世を渡り (*gūḍhaṣ caret: 3.31*)、学ばず、説かず (*na cādhyayana-sīlaḥ syān na vyākhyāna-paro yatiḥ: 3.73*)、世の毀誉褒貶に煩わされる事なく (*mānāvamāne...varjita: p.153.9*)、自ら非難も賞賛もしない (*na nindā-stutir... p.153.14*)。本文は上述の MS.2.162-163, MS.6.47-48を引用 (3.40-43) した後、散文を続ける。

*avyakta-liṅgo 'vyaktācāro bālonmatta-piśācavad anunmattonmattavad ācaran... (3 p.154 8-9)*

徽章を顕さず<sup>(40)</sup>、善業を顕さず、幼童、狂人、賤民の如く、狂人にあらねど狂人の如く振舞い……<sup>(41)</sup>

第四章に移れば「真の行者」(*sad-yati*) は姓名、所属ヴェーダ (*carana*)、学問 (*śruta*) とその成果等を公にせず (2)、盲の如く、せむしの如く、聾の如く、啞の如く (*andhavat kubjavat badhironmatta-mūkavat: 22*)、愚者の如く (*jaḍavat: 36*)、一衣、乃至天衣無縫 (*dig-ambara: p.169 2*) のまま遊行乞食する。彼は徽章 (*liṅga*) に顧慮せず (33, 35, 37)、善業を隠し (*gūḍha-dharma*)、知者ながら愚者の如く挙動不審 (*jaḍavad ajñāta-carita*)、社会習慣に外れ (*varṇāśrama-vivarjita*) 世人の疑惑を買う (*saṃdigdha: 36*)。

次いで第五章は先ず散文の導入部で「幼童、狂人、賤民の如くして、人は生死の何れをも願うべからず」(*bālonmatta-piśācavan maraṇam jivitaṃ vā na kāṅkṣeta: p.180 4-5*) と述べてから、韻文部に次の如く言う<sup>(42)</sup>。

尊敬を得る事を只管嫌悪すべし、尊敬を得れば解脱せる行者と雖も繫縛さる。(7) 弟子を取らず、書を唱えず、説かず、何処にても企画せず。(22)

徽章も目標も顕す事なく、賢者は狂人幼童の如く、知者は愚者の如く己を世人に示すべし。(23)

善きも悪きも、為さず言わず思わず、かく己に満足して賢者は痴人の如く振舞うべし。(24)

賢者は幼童の如く戯れ、巧者は痴人の如く振舞い、知者は狂人の如く語り、聖典を護持する者は牛の如く徘徊すべし。(26) (=BhP.II.18.29)

善からぬ輩に罵られ、蔑まれ、騙され、嫉妬され、叩かれ、苦しませられ、生計を奪われ、(27)

無知の輩に糞尿を掛けられ、種々動揺させられ、苦境に立つも、最高善を望み、己によって己を高めるべし<sup>(43)</sup>。(28)

彼は一般の社会習慣を超越し (*ativarṇāśrami*: 6.10-11, *varṇān āśramān sarvān atitya*: 6.12-13)、生まれたままの裸体の姿 (*nagna*: 6.24, *digambara*, *jāta-rūpa-dhara*: 7 p.204.6-7) で世を渡り、師も弟子も聖典も不要であった (*guru-siṣya-śāstrādi-vinirmukta*: 9 p.220.5)。

## (6) 結論

この様に箴言集 (Subhāṣita) や遊行奥義書 (Saṃnyāsa-Upaniṣad) を中心に古代インドの「軽蔑」の概念を検討してみると、行者が世人の「軽蔑」に耐える「忍辱」の中に積善の道を見出していた事が判明する。のみならず最高の遊行者は最早社会習慣に囚われる事なく (*aty* [-*varṇa*] *āśrama*)、又「読誦聖典」を専らとせず只管己れを隠蔽し、(*avyakta-līṅga*, *avyaktācāra*) 「杖木瓦石打擲」に耐えて遊行していた事が知られる<sup>(44)</sup>。

これら諸点は法華経の「(不) 軽菩薩」の実践に或る解釈の可能性を見出す如くであるが、深い宗教的意味を有した佛教菩薩の行を、この様な視点からのみ論じるのは誤りかも知れない。又法華経法師品や勸持品に反映している成立時の迫害の歴史の実態も考慮に入れねばならないであろう。今はただヒンズー教文献の中から常不軽菩薩の行に類似したものを提示して識者の教示批判を乞うよすがとするが、ヒンズー教の側にも佛教と平行してギリシャの「犬儒学派」の行を思わす「軽蔑探求」(Seeking of Dishonour) の伝統が存在していた事を指摘したいと思う。

併し、それが法華経成立時代に平行してバラモン遊行者の間に存在していたものであったか否かは問題であろう。若しその伝統が Vasiṣṭha-Dharma-sūtra にまで遡り得るとすれば、或いは法華経成立以前にこの種の「行法」が存在していたこととなる。

若しそうであるならば、ヒンズー教の「自己積善」の「常軽の (*sadā-paribhūta*) 行者」 (*parivrājaka*) の行法を、「利他」の「常軽の菩薩」 (*bodhisattva*) のそれに転換したところに、法華経の新鮮味があったと言う事となるかも知れない<sup>(45)</sup>。

### Texts, Abbreviations and Bibliography

- IS. : O.Bötlingk, Indische Sprüche (Osnabrück Reprint 1966).
- MBh. : The Mahābhārata, Poona Critical Edition.
- Edgerton : F.Edgerton, Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar (New Haven 1953).
- Hara 1994 : M.Hara, "Transfer of Merit," The Memoirs of the Toyo Bunko 52 (1994) 103-135.
- 2001 : M.Hara, "Hindu Concept of Anger: *krodha* and *manyu*," Serie Orientale Roma 92 (Festschrift R. Gnoli) (Roma 2001) pp.419-444.
- Ingalls : D.H.H.Ingalls, "Cynics and Pāśupatas: The Seeking of Dishonor," The Harvard Theological Review 55 (1962) pp.281-298.
- Leumann : E.Leumann, "Die Bharata-Sage," ZDMG 48 (1894) 65-83.
- Leslie : J.Leslie, "ABird Bereaved: The Identity and Significance of Vālmīki's Krauñca," JIPh. 261998 455-487.
- Olivelle 1986-7 : P.Olivelle, Renunciation in Hinduism, A Medieval Debate (Vienna 1986-7).
- 1992 : Saṃnyāsa Upaniṣads (Oxford 1992).
- 1993 : The Āśrama System (Oxford 1993).
- 1995 : Rules and Regulations of Brahmanical Asceticism (Albany 1995).
- 2000 : Dharmasūtras (Delhi 2000).
- Renou : L.Renou, Grammaire sanscrite (Reprint 1961).
- Sprockhoff : J.F.Sprockhoff, Saṃnyāsa, Quellenstudien zur Askese im Hinduismus I (Wiesbaden 1976).
- Weiss : M.Weiss, "An account of *unmāda* according to non-medical Sanskrit sources," Adyar Library Bulletin 51 (1987) (Festschrift L.Rocher) pp.294-326.
- 赤沼 : 赤沼智善、印度佛教固有名詞辞典 (京都復刻版 昭和50年)。
- 原 : 原実(1)「回向思想の背景」印度哲学佛教学12 (1997) pp.344-326.

- ：原実(2)「tvam—古典梵語二人称不敬代名詞」インド思想史研究 9 (1997) 78-92.
- 中村　　：中村元　ヴェーダ—タント哲学の発展 (東京1955).
- 丹治　　：丹治昭義「常不輕菩薩と四衆」勝呂博士古稀記念論文集 (東京1996), pp. 311-326.
- 辻　　　：辻直四郎「チャーナクヤ　シャタカ (和訳)」中野教授古稀記念論文集 (高野山1960), pp.183-199.
- 渡辺　　：渡辺照宏　法華経物語 (東京1984)

## 注

- (1) 但しこの合成語を能動の義に取る解釈もなされている (渡辺 220)。-ta に終る過去分詞の能動義については Renou 192 [152] (sens inchoatif), Edgerton 169 [34.15].
- (2) 赤沼、517. Divyāvadāna 38.4-39.15 (Cowell-Neil ed.)　佛は富留那の柔和忍辱 (大正 24 12b10) (*kṣānti-saurabhya* (39.12)) を称えた。Cf. 根本説一切有部毘奈耶薬事 3, 大正24 12a19-b14.
- (3) 丹治312ff. (輪那鉢羅得伽国　陵辱誹謗、杖木瓦石拳脚、刀劍木石、断命)
- (4) 原1997(1).
- (5) Cf. MBh.5.34.77, which has *nā* for *vā* in c. Cf. also IS.6018. Cf. also MBh.7.168.14 (*bhayārditānām asmākaṃ vācā marmāṇi kṛntasi*)  
*tivrāṇy udvega-kāriṇi visṛṣṭāny anayātmakaiḥ*  
*kṛntanti dehinām marma sastrāṇīva vacāṃsi ca (IS.2577)*
- (6) *na tathā ripur na śastraṃ na viṣaṃ na hi dāruṇo mahā-vyādhiḥ*  
*udvejayanti puruṣaṃ yathā hi kaṭukākṣarā vāṇi (IS.3258)*  
敵人も、武具も、毒も、恐ろしき難病も、口汚い罵りの (不滅の) 音節よりなる言葉程には人を恐れさせない (*udvejayanti*)。
- (7) Cf. IS.1549=MBh.1.82.11, 3.295.13, 3.296.29, 5.34.76, 5.139.38, 6.102.11, 8.59.11, 10.10.15, 11.19.6, 11.23.18. それは又「劍」(*asi*) に喩えられる (IS.145-6)。
- (8) Cf. IS.198, 814, 3979, 2852. さればそれは毒蛇にも喩えられる (Pañcatantra 1.304-305=IS.829, 4041, Cāṇakya-śataka 26=IS.6899).
- (9) Cf. MBh.1.82.9=5.36.8=IS.576. この世に於いて蔑視 (*avajñāna*) は死よりも悪い (MBh.3.29.12) と言われる。
- (10) *gurūṇām avamāno hy vadha ity abhidhīyate* (MBh.8.49.109ef). Cf.原1997(2)

- (11) MBh.8.49.65cd (*yadāvamānaṃ labhate mahāntaṃ tadā jivan mṛta ity ucyate saḥ*). Cf. also IS.5946
- (12) IS.746, 5113 MBh.8.30.87=IS.3935.
- (13) MBh.5.33.36=IS.3918, IS.470. 2214.
- (14) Cf. IS.6783, 6997.
- (15) 悪口雑言は人を地獄に導く (IS.3646=MBh.2.59.6, 12.288.8)
- (16) Cf. IS.3724, 3468=Pañcatantra 1.252, 5232-3=MBh.12.115.9, IS.6628-9=MBh.2.65.7-8, IS.3445.
- (17) IS.4652.
- (18) *dvi-carāṇa-ṣaśuṣu bhrātar mā darśaya te guṇān etān*  
*paśavo 'nye guṇa-sādhyaḥ khādantya ete guṇān eva (IS.3017)*  
 兄弟よ、二本足の動物にこれら汝の徳を示す勿れ。  
 それ以外の動物は徳（綱）(guṇa) にて御せられるも、彼等は徳を齧る。
- (19) *mahān apy alpatāṃ yāti nirguṇe guṇa-vistarāḥ*  
*ādharād dhēya-bhāvena gaḥendra iva darpaṇe (Hitopadeśa 3.12=IS.4760)*  
 大なる者も小となる、徳高き人も徳なき人（の口）に（掛れば）矮小化される。  
 受容れ側が小なれば、鏡の中の巨象の如し。
- (20) *anyān parivadan sādhuṣu yathā hi paritapyate*  
*tathā parivadan anyāṃs tuṣṭo bhavati durjanaḥ (MBh.1.69.11=IS.374)*  
 善き人は他人を悪く言って後悔するが、悪き人は他人を罵って満足する。  
*abhivādya yathā vṛddhān santo gacchanti nirvṛttim*  
*evaṃ sajjanam ākruśya mūrdho bhavati nirvṛtaḥ (MBh.1.69.12=IS.505)*  
 善人が長老を敬って満足する如く、愚人は善人を非難して満足す。  
*ātma-cchihnam na jānāti para-cchihnāṇi paśyati*  
*sva-cchihnam yadi jānāti para-cchihnam na paśyati (IS.7471)*  
 己が弱味を知らずに、他人の弱味を見る。己が弱味を知れば、他人の弱味を見ず。
- (21) Cf. IS.902 (*ātma-praśamsa*)
- (22) それは自制心 (*dama*) ある者の特質の一つに数えられる (MBh.12.213.11, 12.154.17)。
- (23) Cf. *para-dārān para-dravyaṃ parivādaṃ parasya ca*  
*parihāsaṃ guroḥ sthāne cāpalyaṃ ca vivarjayet (Cāṇakya-śataka 30=IS.3924)*  
 他人の妻、他人の財産、他人の悪口、長上への嘲笑、住所の不定を避くべし。（辻直四郎訳）
- (24) IS.295, 296, 297=Nitiśataka 3.34, MBh.1.82.9, IS.638=MBh.12.174.20.

(25) *vacanair asatām mahiyaso na khalu vyeti gurutvam uddhataih*  
*kim apaiti rajobhir aurvarair avakirṇasya maṇer mahārghatā* (Śiṣupālavadha  
 16.27=IS.5903)

悪人の傲慢な言辞によるも、偉大人の尊厳は変ることなし。

宝石の高価なる事は、塵にまみれて、消え行くや。

*hasta iva bhūti-malino yathā yathā laṅghayati khalaḥ sujanam*

*darpaṇam iva tam kurute tathā tathā nirmala-chāyam* (IS.7376)

灰に穢れた手が鏡を擦る如く、悪人が善人を揉みくちやにすればする程、彼をして更に無垢の光り有らしめる。

(26) MBh.2.41.15=IS.896, IS.2225, MBh.5.33.26=IS.3529.

(27) Cf. MBh.5.36.15, MBh.12.288.17=IS.5611.

(28) Cf. IS.400.

(29) Kullūka によれば人がその為に嘘をつく「七門」とは五官と *buddhi* と *manas* である。

(30) この語に就いては Hara 2001.

(31) Cf. MBh.5.36.9, 12.115.2-3, Cf. Hara 1994.

(32) この *vānaprastha*-Brahmin の奇行については Weis 310参照。

(33) Ingalls 1962, Olivelle 1992 107-112, 1993 166,229-231, 1995 312-4.

(34) Cf. Sprockhoff 155-186.

(35) Leumann 67-70.

(36) *ukto 'pi bahusāḥ kiṃcij jaḍa-vākyam abhāṣata*

*tad apy asaṃskāra-guṇaṃ grāmya-vākyokti-saṃśritam* (40)

*apadhvasta-vapuḥ so 'tha malināmbara-dhṛg dvijaḥ*

*klinna-dantāntaraḥ sarvaiḥ paribhūtaḥ sa nāgaraiḥ* (41)

*saṃmānanā parāṃ hāniṃ yogarddheḥ kurute yataḥ*

*janenāvamato yogī yoga-siddhiṃ ca vindati* (42)

*tasmāc careta vai yogī satāṃ dharmam aduṣayan*

*janā yathāvamanyeran ācheyur naiva saṃgatīṃ* (43)

*hiraṇyagarbha-vacanaṃ vicintyetthaṃ mahā-matiḥ*

*ātmanaṃ darśayāmāsa jaḍonmattākṛtiṃ jane* (Viṣṇu-purāṇa 2.13.44)

(37) Leumann loc. cit.

(38) 中村 361 and 664

(39) Text は O.Schrader 129-221に拠っている。

(40) ここに徽章 (*linga*) とは Sectarian Mark 等、行者たる事を明示する「標」一般の義

である。(Olivelle 1986 26ff.)

- (41) この遊行者 (*parivrājaka*) の規定は *Vasiṣṭha Dharma-sūtra* に遡る (Olivelle 2000 386)。

*avyakta-liṅgi 'vyaktācāraḥ (18) an unmatta unmatta-veṣaḥ (Vasiṣṭha-dharma-sūtra 10.19)*

- (42) *abhipūjita-lābhāṃś ca juguṣetaiva sarvaśaḥ*

*abhipūjita-lābhais tu yatir mukto 'pi badhyate (7)*

*avyakta-liṅgo 'vyaktārtho munir unmatta-bālavat*

*kavir mūkavad ātmānaṃ tad dṛṣṭyā darśayen nṛṇām (23)*

*na kuryān na vadet kimcin na dhyāyet sādhu-asādhu vā*

*ātmārāmo 'nayā vṛtṭyā vicarej jaḍavan muniḥ (24)*

*budho bālakavat kṛḍet kuśalo jaḍavac caret*

*vaded unmadavad vidvān go-caryāṃ naigamaś caret (26)*

*kṣipto 'vamānito 'sadbhiḥ pralabdho 'sūyito 'pi vā*

*tādītaḥ saṃniruddho vā vṛtṭya vā parihāpitaḥ (27)*

*viṣṭhito mūtrito vājñair bahudhaivam prakampitaḥ*

*śreyas-kāmaḥ kṛcchra-gata ātmanātmānam uddharet (28)*

*saṃmānanam parām hāniṃ yogarddheḥ kurute yataḥ*

*janenāvamato yogī yoga-siddhiṃ ca vindati (29)*

*tathā careta vai yogī satām dharmam adūṣayan*

*janā yathāvamanyeran gaccheyur naiva saṃgatim (5.30)*

- (43) (29-30) は既述の *Viṣṇu Purāṇa* 2.13.42-43 と同文である。尚、第六章以下に関連章句を求めれば次の如くである。

*yathainam avamanyante janāḥ paribhavanti ca*

*tathā yuktaś cared yogī satām vartma na dūṣayet (6.4)*

Yogin は心して世人が彼を蔑み、又非難する様に行動すべし、ゆめ善人の道を汚す事勿れ。

- (44) Cf. *vādam tu yo na pravaden na vādayed yo nāhataḥ pratihanyān na ghātayet*

*yo hantu-kāmasya na pāpam icchet tasmai devāḥ sprhayanty āgatāya (MBh.5.36.11)*

非難されても非難を返さず、他の者にも非難させない人。打たれても打ち返さず、他の者にも打たせない人、自分を殺そうと望む相手に悪意を持たぬ人。神々はその様な人が来ることを望む。(上村勝彦訳)

- (45) 但しその場合、梵語原典では *sadā-paribhūta* のまま極く自然に通用していたものを、

何故に鳩摩羅什が敢えてそこに「不」の一字を挿入し、それが却って東アジア佛教徒の間に流布し定着して行った事が問題となるであろう。

(11) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(12) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(13) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(14) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(15) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(16) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(17) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(18) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(19) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(20) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(21) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(22) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(23) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(24) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(25) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(26) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(27) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(28) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(29) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(30) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(31) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(32) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(33) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(34) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(35) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(36) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(37) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(38) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(39) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(40) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(41) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(42) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(43) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(44) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(45) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(46) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(47) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(48) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(49) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(50) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(51) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(52) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(53) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(54) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(55) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(56) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(57) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(58) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(59) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(60) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(61) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(62) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(63) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(64) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(65) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(66) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(67) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(68) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(69) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(70) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(71) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(72) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(73) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(74) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(75) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(76) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(77) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(78) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(79) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(80) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(81) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(82) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(83) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(84) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(85) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(86) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(87) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(88) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(89) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(90) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(91) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(92) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(93) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(94) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(95) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(96) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(97) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(98) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(99) 鳩摩羅什の訳語 (1988)

(100) 鳩摩羅什の訳語 (1988)